

開拓者精神に感銘

——五十八年度シンポジウムで——

伊 丹 末 雄

昭和五十八年十一月十二日、早稲田大学で行われた上代文学会の「万葉集はいつできたか」というシンポジウムほど、私のような者にとって益多かった行事は近年珍しい。これを企画された事務局はもちろん、講師として蘊蓄を傾けられた井口樹生・中西進・山口博の三氏、それから司会にあたられた橋本達雄氏のご労苦に対し、まづもって心からのお礼を申し述べておきたいと思う。

質疑応答の最後に、図らずも橋本氏からご指名があったので、私は「やむをえず」とことわったうえ、主として山口氏の新説を頭におきながら、簡潔に二つの点を述べさせていただいた。井口氏は師の師たる故折口信夫氏の説を祖述されたのであり、中西氏は先年公表済みのご研究を要約されたのであったため、現在、斬新なご見解を主張していられる山口氏の説に対する感想となつてし

まうのが自然の成りゆきである。

私の発言は、要旨左のごときものであった（本稿と一読の後、読み返していたければ幸甚）。

(1) わが国古代における記録または伝来上の諸条件から推すに、むやみに多数の和歌が後代に伝えられたとは思われず、また、いくつもの万葉集があったとも考えにくい。つまり、万葉集の多くの部分は古くからのもので、一部に増減と変容をとげながら、ある文献にはAの姿で書かれ、ある書物にはBの形で記され、といったふうにして伝わったのであろう。

(2) 万葉集の資料となった歌集またはメモ類には名もなく伝わったものがあつたであろうが（『古歌集』等）、万葉集という一つの歌集に収められたときからは、その編集意図のもとに処理されていたはずで、なんとなく伝わる、

などということはありません。そうして、万葉集編纂にかかわった人物として、大伴家持をちよっぴりとも想起してほしかったと思う。

何分、突然のご指名だったため、文字どおり冷汗三斗の思いで閉会を待ち、急いで会場を辞した私に、翌日、尾崎暢殃先生からお電話があり、機関誌のため、今回のシンポジウムに関連する一文を寄せるように、との厳命が下った。あわただしく本稿を草するゆえんである。

ところで、この小文もまた山口博氏の万葉集の形成に関するお説を主たる対象とすることとなる。事情は上記のとおりとご理解いただきたい。

山口説は今日まで、まとまった体裁を成さず、やや断片的に発表されてきたため、正直なところ、私にとつてはその内容を初めて承わるものであったが、幸い、時を同じくして新説をわかりやすく描かれた『万葉集形成の謎』が刊行されたため、ご発表において略された部分をご新著により補いながら論評してゆくこととする。

それにしても、ここで一つ、ことわっておくならば、氏のご発表のふしぶしに、万葉集の研究者は平安以後の文献にうとかるう、との、いたわりが感じ取られたが、ご心配ご無用で、いやしくも和歌を学ぼうとする者に古

代、中世の壁があつていい道理もなく、私みたいな、言わば素人ですら、氏の引かれる文献のほとんどに目をとおしているつもりである。たとえば、若き日の小著「実朝秀歌」（日本古典文学大系『山家集・全槐集』参照）と『万葉集成立考』とだけを見ていただいても、お察し願えよう。

万葉集の成立ないし伝来をさぐる者の、うめき声を発せずに越せない一つの難関が「新撰万葉集」、とりわけ、その序であること、いうまでもない。序文を、菅原道真の書いた本物と見るか、それとも後人の偽作と斥けるか。山口氏は確かな道真の文章として尊重し、それに立脚して論陣を張られているわけであるが、従来多くの万葉学者はこれを避けて通ってきた。私自身もまた、「新撰万葉集」に対して疑いを抱き、敬遠して今日に及んだことを告白しなければならぬ。

なにしろ、「新撰万葉集」と呼ばれる書物は、上下ただ二巻で（日本紀略参照）、こればかりの分量をもって、なぜ、このように名づけられたものがすすでにふしぎである。しかも、内容的にも和歌と漢詩（七言絶句）を対応させながら収めていて、万葉集とは連ならない。下巻の序と詩とにいたっては、とても、もともとのもの

と思われず、問題の上巻の序も、はたして菅公の記した、「新撰万葉集」の序として認めうる性格の文章か否か、不安でたまらない。そうした序文を山口氏が立論の大事な資料とされた勇氣は脱帽に値する。なぜならば、冒険こそ進歩のための前提でなければならぬからである。ただししかし、氏の開拓者精神のみごとさと成果の信憑性とが必ずしも一致しない以上、われわれとしては慎重な態度をもって臨むほかならう。率直に言つて、「数十巻」とさえ万葉集の分量を記す序文の作者が、それと相對する「新撰万葉集」をただの二巻にまとめるものかどうか、まことに疑わしい。もし、元來、別々のものだった序と詩歌集とを合わせた書物であろうとも、それならば、なにゆえに両者が結合するにいたつたのか、がすでに問題たりうる。

ここで一步も二歩も譲つて、山口氏のご見解とおり、「新撰万葉集」の序文をもって菅原道真の記した、信ずるに足る文章とするなら、それなりにまた発言したいところがいろいろ生じてくる。

まず、道真の序文に「万葉集」と明記され、彼の時代に命名されたことわらない以上、その万葉集は序文以前にもはや集名を帯びて存在していたこととなるはずではないか（この論理は山口氏等に学ぶところである）。整理

が不十分で、草稿本の姿だったとしても、とにかく「万葉集」と呼ばれる歌集として世に伝わっていたのであって、山口氏は後に「草稿本」ということも用いられながら、序文の記す万葉集を何かしらバラバラの資料に近く説明されるけれども、草稿本を漢文で記せば、あななるわけであろう。現に伝わる万葉集にしても、整理は決して充分でなく、漢籍を読み慣れた道真等の目から見るならば、なお草稿に近いはずで、巻数不明のため判断できかねるにせよ、道真の手を加えたという伝來本万葉集がほぼ現に伝わる万葉集に相当するのであろうか。実際には、山口氏は今に伝わる万葉集をどうやら「草稿本」——道真の再編した本を指す氏の用語——と考えられるようだが、それでは巻数が「数十巻」に合わない（後で私の歌集は道真時代に初めて出現したものでなく、「後拾遺集」時代につくられたものでもなく、道真以前に正に存在していた。このことを忘れては困る。

なお、道真が「数十巻」の万葉集をつくる際、あらゆる歌を集めたというのに、なにゆえ「新撰万葉集」に収められた歌をも用いなかったものか、ふしぎに思われる。

ご新著にまとめられた山口氏のご見解を、順を追って

吟味してみよう。

(1) 道真は彼の前にある万葉集を草稿本つまり原稿と見ている。

私はこの点を、草稿本と受け取ること上記のとおりで、山口氏もときおり「草稿本」と記されるのである。(2) 道真は勅命を受け草稿を編集し直した。

これをそのまま受け容れてみようか。卷十八の一部をはじめ、平安時代の手の加わった形跡が万葉集に確かに見えるからだ。但し、山口氏はなかなか広い範囲にわたって例証分析してみせてくださるが、その多くは別な問題に所属すべきものであると思う(後で論ずるつもり)。

もしも「新撰万葉集」序のこの記述が事実とすれば、万葉集はこのときをもって勅撰の歌集となったのである。山口氏は竟宴の行われたことまで記されるが、私は証拠とされるものに信を置きにくい。しかし、山口氏のような解釈もあるわけで、それならなおのこと、万葉集勅撰説をもっと声を大にして主張すべきではないかと思う。

しかも、氏はさらに「後拾遺集」時代まで研究の手をゆるめようとされない。すでに勅撰歌集として「成立」してしまつた万葉集を、今度は「形成」に向かつて論ぜられるのだから、私のような鈍才が狐につままれた思い

で見守るほかないのも止むをえまい。ただ一つ困るのは、現に伝わる万葉集を勅撰の歌集とみなす学者が少く、私なども、なぜ未完成のまま後代に伝わったのか、を説くために苦心してきたわけであるが、勅撰の万葉集がどのような形態のもので、なにゆえ今日に伝わらず、異本のみが伝来したか、さらに詳細に説明していただくなければ、道真時代の万葉集勅撰説は容易に認知されないのではなからうか。もっと単的に言えば、山口氏の指摘される「古万葉集」は九卷となるらしいけれども、実際には九卷などという区切の悪い巻数だったとも思えず、しかも、その九巻中に氏の言われる平安時代の手入の跡が見えたりする。

(3) 編集し直した万葉に伝誦歌を付け加えて、数十巻の集も作った。

「編集し直した万葉」とは、すなわち(2)の万葉集を指すのであろう。その「万葉に伝誦歌を付け加えて、数十巻の集も作った」というのは、どういうことか。山口氏は(2)の万葉集に大がかりな増補が行われたように考えられているが、十一巻では、「数十巻」の手前、少なすぎはしないか。

(2)について述べた疑問、それから右の疑問からすると、今伝わる万葉集が「数十巻」本万葉集——山口氏の

呼ばれる「草稿本」に近い性格を示しているように思われてならない。しかし巻数がまるで違う。そこで、仮に山口氏の立場に立てば、こういうことになるまいか。現に伝わる万葉集を見るに、巻五をはじめとして、昔、二巻以上だったのが一巻とされたのではないか、と思われる巻々が見える。したがって、今いう万葉集と大差のない分量で「数十巻」の歌集がかつて存在したとしても、何等ふしぎでない。もし、「数十巻」本がどうして二十巻本に編みなおされたか、が問題となるならば、「古今集」の巻数に做つたとする対応が可能であろう。そうして、はつきり二十巻に整理され終えたのが「後拾遺集」のつくられる少し前だったのでないか。私は、二十巻もまた「数十巻」でありうるとする意見に同調しかねる者である。

上記のような編み替えがいろいろに行われたと想定することにより、平安以後の各巻の収録歌や巻尾のずれも説明できるような気がしてくる。

しかも作歌ないし歌学のさかんだった平安・鎌倉の貴族階級は、よく訓めない万葉集の歌を、自分たちのかつてな訓みかたで、好きなものから抜き出す風潮をもっていったため、種々雑多な本が出現したはずなのである。

以上、山口説に立って、氏の説を補強しようとして試みた

わけであるが、一足踏み誤れば次々と危険箇所にはまり込まなければならぬはずで、かんとんに同調しきれものではない。「数十巻」本万葉集にしても、現に伝わる万葉集に「類聚歌林」とか「柿本朝臣人麿歌集」とかいった古い歌集を合わせたものごととする説明も可能かもしれないし、その中に「新撰万葉集」をも包含できるようにも思われる。

しかし、虚心に「新撰万葉集」序のこの部分を読むとき、古代において「数十巻」本万葉集の編纂はやはり無理であるまいか、と考えられてならない。すなわち、序文自体を疑うべきであろう。

それはそれとして、山口説には別な面で興味をそそられるのを否めない。問題の序によれば、草稿本の姿で伝わった万葉集はおびただしい歌の記録に見えたらしいし、まして、道真のまとめあげた「数十巻」本万葉集にいたっては、たいへんな歌数を擁していた。そうとするなら、「万の歌の集」という意味で集名が付された、とする解釈がなかなか自然に感ぜられてくるはずで、集名研究を刺激するものを内蔵している。

(4)数十巻万葉の中から秀歌を選び、抄本を編んだ。

こうして、つくられた万葉集の抄本を具体的に示すとしたら、さしずめ「和歌見在書目録」抄集歌に記された

「万葉集二十卷抄」あたりになろうか。この書名の「二十卷」は、「二十卷たる万葉集の抄」とも受け取れるし、抄そのものの分量を示すようにも考えられる。後者の場合、「数十巻」本万葉集の一部が抜かれて二十巻とされたこととなり、別に支障を生じない。「数十巻」本が二十巻本に編みなおされたというのだから、「二十巻」の抄があってもいいはずであろう。紀貫之のつくったと伝えられる「万葉集抄五巻」（和歌見在書目録）にしても、貫之の編は怪しく、ともすれば候補の書となりうるかもしれない。

むしろ問題は別なところにある。つまり、この序を山口氏のように読み取ると、なんと菅原道真は相次いで三種の万葉集を編んだこととなってしまいが、はたして、それを真に受けていいのだろうか。彼がいかに有能な人物であったとしても、本来、漢学者の身をもって、そんな仕事ばかりしていたとするなら、まことに異様な生活であり、第一、作業量が多すぎはしないか。おそらく、解釈がやや妥当性を欠くのであろうし、そうでなければ、対象の「序」が事実を語っていないこととなってしまふ。いとも無難作に「草稿」本万葉集を整理し、さらに「数十巻」本万葉集を編纂したかと思うと、今度はその抄本まで作った、というのが、そもそも、どれだけ

の協力者を擁して、それほどの大事業を遂行したのか、いっこう記載もない。おかしいではないか。

万葉集の編纂にかかわる記録は、なにも「新撰万葉集」の序に限るわけではなく、いわゆる梨壺の五人中の源順や大中臣能宣の家集等に「訓み解き撰ばしめ給ふ」（源順集）というふうに、彼等の、村上天皇に命ぜられて万葉集に立ち向かったことが伝えられている。「訓み解き」までは、ほとんど読みがたいまでになっていた万葉集であってみれば、さもありません、と、すなおに理解できるとしても、次の「撰ばしめ給ふ」となると、す通りでかかねる。山口氏は秀歌を選ぶことと解されたが、私もまた、訓を施した、または訓のみの抄本をつくる作業だと思う。それは、せつかく「訓み解」いた結果を利用するの抄本だったろう。この時代以後にわかにつ訓の写本が遺るようになった事実から推しても、まちがいないさそうである。その際、かなり恣意的な方法が採られたことについて、すでに言及しておいた。それが山口氏等の調査を誘うわけであろう。いわゆる下絵本万葉集を、ただ二葉の断簡から垣間見ても、仮名書きで、歌の順序が今伝わる万葉集と多少異なる。こうした本の後に付訓本が次々とつくられていったらしい。私もまた「万葉五

「巻抄」が実は源順等の抄本なのでないか、と推量してみるけれども、今に伝わらない以上、確かめがたい。仮名本や付訓本の場合、読みやすさ、美しさが大事な目標となるために、注の類がまま省略されるわけで、下絵本に注が見あたらなくても、いぶかしむ必要などなからう。

さらに下って、藤原定家から「後拾遺集」時代にかけてのご論述について、ほんの少し触れておきたい。

定家が源実朝に贈った「相伝之秘本」(「明月記」)万葉集を後に仙覚が尊重するところから察して、善本は善本であつたろうと思うが、定家所有の最善本でなかつたように推測される。重代の歌の家が万葉集を失つてしまつたら沽券にかかわらう。贈呈にあたり、急いで写本をつくつて、という方法を採用しても、そうした本では権威を保ちがたい。定家は所領についての訴訟に勝たせてもらいたくて贈つたのであろうから、もつたいぶる必要もあつたとともに、相手がまるで読めなくては具合が悪いかつた。したがって、どちらかといえば付訓本を贈つたことと想定される。第一、定家自身、古典に対する熱意は貴重としても、はたして白文の万葉集をどしどし読めたものかどうか、多少の疑問を禁じえない。「長歌短歌之説」等から見て、私は、定家がふだん使用した万葉集は

今日いう二十巻本でなく、平安時代に編まれた、くずれた万葉集もしくはその抄本だつた、と臆測したい。それが現今、研究者を惑わす一因となつていたのでなからうか。

山口氏等は、「後拾遺集」に初めて万葉集の巻数が二十巻と記されるゆえに、それより少し早い時代に万葉集が「形成」されたものであることを主張される。しかし、これほど、わかりにくい議論も珍しからう。他の典籍に詳記されるということと「形成」とは、おのずから別な問題である。他に記されなくとも、「古今集」の序が万葉集に対する敬意を表明して、その巻数が二十巻であつてみれば、おそらく万葉集の巻数を踏襲したものであらう、と考えたくなるわけで、「万葉集二十巻抄」も一つの傍証たりえようか。

精撰されず、「草稿」本としか扱われなかつたかもしれないとして、万葉集は古くから二十巻たりうだけの分量を具えていたように思う。すでに先行の歌集(「類聚歌林」が七巻であつたのだから、万葉集の巻数ないし分量がそれをかなりの程度、上回るのが自然で、何よりも「万葉集」という集名自体すでに大部の歌集たることを教えてくれている。したがって、山口氏の指摘される九巻では、やはり、もの足りず、二十巻こそ最もふ

さわしい巻数となろう。ややこしい問題ながら、実のところ私は巻数にのみ、こだわるものでなく、総量にして二十巻分、二十巻相当のものが妥当であろうと言いたいわけで、今日の万葉集ぐらいの量でいいはずだ、と表現しなおしても何等かまわない。

シンポジウムの日、三氏のご論説を拝聴しながら、私の脳裡に鮮明に浮かんだ一事がある。

万葉集そのものを熟視するに、天平十六・十七年ごろまでの歌をもって編んだ巻がかなり多く、とにかく、その直後に一度編纂されていることはまちがいない。そこから、万葉集の相当部分が天平十八年ごろ編まれたのであつたらう、というのが私の述べてきたところで、なによえ十七年を避けたかといえは、材料たる歌を収集整理するのに若干の日数を要するうえ、十七年は橘諸兄と藤原仲麿の勢力争いが激しく、諸兄が敗退していく年で、諸兄側に属した大伴家持は、とても歌集を編んでなどいられる状態になかつたらう、と史家、たとえば北山茂夫氏が判断されている（大伴家持）が、まことにそのとおりで、そうしたところから私も私は十八年説を唱えてきた。

天平十八年とその前後。そもそも万葉集成立史上、これを凌ぐ頂点をどこに発見できよう。私の視点はなんと

してもまず天平のはるかな時代に熱く注がれ、それから、おもむろに光仁朝とか平城天皇時代とかに移るのであって、菅原道真や梨壺の五人や橘俊綱・藤原顕綱等に對する興味の、さまで深まらないのを如何ともすることができない。

それにしても、かつて思い切った発言ばかり重ねてきた自分が、ふと気づけば、もはや明らかに保守陣営に身を置いてしまっている。人々との、ごあいさつもそこそこに、一人悄然と帰途につきながら、私のかみしめた、ほろ苦い思いを知るものは、僅かに携行した「新校万葉集」のみであつたはずである。

（一九八三・一一・三〇）

付 記

いうまでもないこととして本文に記さなかつたのだが、山口説の全部か主要部分かが認められてゆくものがあるならば、これまでの万葉集研究の大きな部分がぐずれ去るわけで、ことは決して成立研究の分野にとどまらぬ。

しかも、その影響は複雑に作用するのであって、一例を人麿歌集の問題に取つても、山口氏の指摘される古い諸巻、後の巻々のいずれにも歌集からの歌が収められて

いる事実をどのように理解すべきか、に始まる、むしろかしい問題が生ずるはずで、略体歌も非略体歌もあったものでない。私はシンポジウムの当日、こうした混乱を恐れながら発言していた。しかし、それは新しい見方を妨げようとする策略とは次元を異にするつもりである。